

(ダニエル 2:40)「四番目の王国ですが、それは鉄のように強いものとなります。」

(ダニエル 2:41 - 42)「足とその指とが一部は陶器師の成形した粘土、一部は鉄でできているのをご覧になりましたが、その王国は分かたれたものとなります。ですが、鉄の硬さもその中に幾分かあることでしょう。そして、足の指が一部は鉄、一部は成形した粘土でできていることについて言えば、その王国は一部は強く、一部はもろいものとなるでしょう。」

「鉄と粘土」からなる国は第4番目の鉄の国が後代に粘土が混ざる変化を描写しているのであり、やはり全部で四つしか存在しません。また、「強くてもろい」ということは、野獣で言えば、10本の角（独立した主権を持つ）が合体した、つまり、民主的な十カ国からなる連合軍という形態に変化していることを示しています。



ダニエル2章の「像」と7章の「獣」の比較 と黙示録13章の野獣との関連性

ダニエルの預言に出てくる世界強国

<p>途方もなく大きな像 (ダニエル 2:31-45)</p>	<p>海から上って来た 四つの獣 (ダニエル 7:3-8, 17, 25)</p>
<p>第1番目の獣 バビロニア 西暦前609年以降</p>	
<p>第2番目の獣 メディア-ペルシャ 西暦前539年以降</p>	
<p>第3番目の獣 ギリシャ 西暦前31年以降</p>	
<p>第4番目の獣 ローマ 西暦前30年以降</p>	



神の王国

← 頭が7つで、角が10本あるので、1本ずつ配って、余った3本を適当に振り分けておけばいいと言わないいい加減なものではありません。

(ダニエル 7:7)「四番目の獣、恐ろしく、すさまじく、際立って強いものがいた。そして、それには鉄の歯が、大きなものがあつた。」

(ダニエル 7:23 - 27)「『第四の獣について言えば、地に生じる四番目の王国がある。それは他のすべての王国とは異なっているであろう。また、十本の角について言えば、その王国から起こり立つ十人の王がいる。』

野獣は4番目で最後であり、神の王国はこの4番目の野獣[古代ローマから終末まで存続]を倒して樹立するのでローマ以外の第5番目の世界強国などは存在しません。

10本の角は後から「起こり立つ」もので最初からあるわけではありません。啓示13章の獣の描写から分かるとおり、この10本の角は終末期の野獣の状態であり、7つの内の最後の頭だけに存在するものです。つまり、後代の変化を表すもので、像の脚部の足指10本に相当します。



啓示17:10の7人の王たち



古代ローマ帝国として台頭した「第4獣」は終末（主の臨在）まで存続するので、ローマは最後まで存続し続け、そして、統治形態を変化させて、10人の王からなる連合国として、終末期にその絶頂期を迎え「ついにその獣は殺され、その体は滅ぼされて燃える火に渡され」（ダニエル7:11）ることになっています。それで、古代ローマ帝国はどうなってしまったのか、あるいは、現在どうなっているのか、これからどういふ事になるのかを探るために、先ずローマの歴史を簡単に振り返る事にしましょう。

ローマというのはイタリアのローマから興って古代ヨーロッパを支配していたローマ帝国のことですが、このローマ皇帝位は西ローマ帝国が滅びたあと、しばらくしてフランク王国のカルル大帝に与えられます。

カルル大帝没後の843年、フランク王国は東フランク、中部フランク、西フランクの3つに分割されました。さらにその後、北イタリアを除く中部フランクは東西フランクに併合、こうして現在のドイツ、イタリア、フランスの基礎がつけられます。

1024年にドイツ王ハインリッヒ2世が、「うちの国はこれからローマ帝国と呼ぶ」といったのが神聖ローマ帝国の始まりです。

19世紀初頭にはフランス皇帝ナポレオン・ボナパルトの侵攻を受け、フランスの属国的なライン同盟に再編された。帝国内の全諸侯が帝国からの脱退を宣言すると、既に「オーストリア皇帝フランツ1世」を称していた神聖ローマ皇帝フランツ2世は退位し、帝国は完全に解体されて終焉を迎えた。

これが、一般的な歴史書などに示されている、「ローマの終わり」という説明です。

しかし、明確にしておかなければならないのは、ナポレオンは神聖ローマ帝国を滅ぼしはていない。ということです。神聖ローマ帝国は自主解散です。

しかしながら第二次世界大戦後、神聖ローマ帝国の再評価が行われている。ということです。

従来のような評価（上記ライン同盟時終焉）では、ヴェストファーレン条約以降まったくドイツで宗教戦争が起こることなく新旧両派が共存できたのはなぜか、あるいは小国に分裂したのであればなぜその小国群のほとんどが帝国崩壊まで命脈を保つことが出来たのか、といった疑問に答えることが難しいためである。とされています。

それで、神聖ローマ帝国は1945年までの「ヒトラーの第三帝国」までを含むとする歴史解釈もあります。

というわけで、ともかく今は「ローマ」は明確な形で存在しません。聖書は、メディア・ペルシャとギリシャの名を挙げていますが、「ローマ」の名は挙げていませんので、最終期の第四獣、つまり第7番目の王も「ローマ」の名で呼ばれるかどうかは定かではありません。しかし、かつてのローマ帝国を踏襲する諸国から構成されていなければ、同一獣とすることはできないでしょう。少なくともかつての発祥地は含むはずで、地中海近辺の諸国を無視することはできないでしょう。ここでは、便宜上、第七世界強国を「復興ローマ」と称して説明してゆこうと思いますが、この復興ローマは啓示13章で「海から上がる野獣」として示され、当然その七つめの頭に相当しますが、その頭について、注目すべき記述があります。

(啓示 13:3)「その頭の一つがほふられて死んだかのようにになっているのを見た。しかし、その致命的な打ち傷はいえた。それで、全地は感服してその野獣に従った。」(啓示 13:12) …, 致命的な打ち傷のいえた… (啓示 13:14) …剣の一撃を受けながら生き返った野獣…」

この「剣の一撃」がいつの時点なのかという事を特定するのは、かなり困難ですが、二つのケースが考えられます。

[ケースA] 聖書の記述からすると、登場して来る時、すでに「死んだかのように」なっていると読めるので、復興ローマは、かつての「剣の一撃からの復活」こそが、「ローマ」の復興になるということかもしれません。そうだとすると、ライン同盟では「自主解散」であって滅ぼされてはいませんので、「ローマ」が受けた「剣の一撃」と言えるもの言えば唯一第二次世界大戦でのドイツの敗北以外にありません。

[ケースB] あるいは、10本の角を持つ連合国として復興を遂げるやいなや「剣の一撃」を受け、その後奇跡的な復活を遂げ、全地が感服するというシナリオかもしれません。

黙示録の中では、ダニエル書7章の「3本も引き抜いて、後から出て来る小さい角」に関する記述はないので、これに相当する出来事が、復興のどの時点で生じているのかを併せて考慮してみますと、「致命的な打ち傷から生き返った後は、四二ヶ月間の行動する権威が与えられ、聖徒を悩ます三時半が始まっていますので、この時、すでに「小さい角」が出ていることとなります。

「ケースA」の場合、生き返った段階で10本の角が生え出した状態で、その後3本が引き抜かれ、「小さい角」が生え出て来ることになるので、それが起きないうちは「四二ヶ月」は始まらないこととなります。

これらを考慮すると、「ケースA」は可能性が低く、むしろ、ある時点で10カ国からなる連合国として「復興ローマ」を遂げ、その後、何らかの戦争（もしかすると第3次世界大戦）で剣の一撃を受け、仮死状態に陥り、その時3カ国は抜き取られ、その張本人である「別のもの小さいもの」の行動によって生き返り、最終獣の姿である7本の角+小さい角が存在することになると考えられます。

さて、いずれにしても、復興ローマはかつてのローマの領域に限定されたものでなければ、第四獣とは別物になってしまうので、例えば、英国は、その領域内ですが、アメリカは「ローマ」とは何の関係もありません。また、復興ローマは10本の角として再スタートするので、英米合わせても2本にしかならないので、「英米」が第七番目の王にも、最終的第四獣ともなり得ないのは明らかです。



剣の一撃から生き返る復興ローマ